

和田傳全集

第五卷

和田傳全集 第5卷

定價 2,800 円

昭和五十三年七月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

(〒162)

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 法 人 家 の 光 協 会

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 | 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第五卷

和田傳全集（第五卷）目次

遠い牧歌

5

裾野

244

近所衆

306

蒔きちがい

324

枯れ葉しぐれ

346

裯襠

367

子孫

389

解説

赤星虎次郎

装幀
舟橋菊男

題字
久住和代

遠い牧歌

一章

ほの白くしらんだそとの明るみが雨戸の隙間からさしこみ、しだいにそれが水玉模様のように浮き出すと、さながらそれを待ちかまえていたみたいに、佐左衛門はぴかりと奥の部屋の間で眼を見開いた。大きな母屋のなかではもの音ひとつしない。

ぴかりと眼を見開いた佐左衛門は、二、三度それを大きく瞬くと、次に蛇のように鎌首をもたげた。そして見開いた眼は、次の六畳の中の間と十七畳半の表座敷の間を射貫き、その向こうの土間を貫き、男部屋の縄暖簾を貫いてそこでびたりととまった。すると、殆んど同時であった。縄暖簾を肩で割り、なかから下男の友次郎が眼をしばたきながら土間に下りた。

それと殆んど同時に、中の間の裏になっている女部屋からは蒲団をたたむ塵ッぽい音が聞こえ、聞こえたと思うともう下女のおしんは土間の隅の火焚土に蹲んでマツチを摺っていた。竈の下で火が燃え出すのと、男部屋の前でトントントンと藁を打つ音が響き出すのは、合図でもし合ったようにまったく同時であった。

これらの三つの行動、すなわち奥の間で佐左衛門が鎌首をもたげてばちばち瞬くのと、男部屋から友次郎が肩で縄暖簾を割って土間に下りたつのと、女部屋からおしんが竈の前を下りて行って蹲むのとは、雨の日風の日の春でも冬でも寸分の狂いなくこの佐田家の一日の事始めなのだ。それに狂いがあったためしがなく、また、ある

うとは思われなかった。

下男の友次郎は、奥の間でばかりと見開かれた主人のきびしい眼を本能のように感知するが、ぱりと跳ね起き、眼にもとまらぬ速さで寝具をたたんで隅に積むと、縄暖簾を割って土間に下りるが、言葉通りそれは瞬く間の速業であった。友次郎は寢床には野良着に着替えてから這入るのである。それも佐左衛門の仕込みで、その木綿の野良着で寝る下男のためには、彼はそれよりもっと丈夫な太糸の手織り木綿の寝具をあてがっておくのであった。

縄暖簾をくぐって土間に下りると、丁度そこところに、藁を打つ石が埋められてあった。何代も昔からいろいろな男がそこで藁を打った石で、手の膩あせですべすべとした色艶を出し、もはやそれは石というよりは家具と言ふべきであった。石の脇には木槌が置いてあり、蓆が一枚巻いて立て掛けてあり、藁が置いてある。前の晩寝る前に友次郎が取り揃えておいたものなのだ。

友次郎はいっしんに藁を打つ。その藁を打つ音が、隣近所のどこの家のに遅れることも佐左衛門はゆるさなかった。つねに友次郎の打つその音が最初に響き出し、やがて次々と近所の家々からも同じような音が響き出すのである。友次郎はまた綿密細心に気をくばって槌を打ち下ろす。その槌の音を寢床のなかで佐左衛門は聴いてい、槌の音でおぬしの心の加減がわかる、何だその打ち方はと、いつ手きびしい叱咤が飛んで来るかわからない。トントントンと打ち出すその槌の音は、主人への心のまことを、じかに響かすものでなければならなかった。ほいッ、ようッ、ほッ、ようッ、と、彼は威勢よく合いの手を入れて打ちつづける。

火焚土の竈の前ではおしんが蹲みこみ、長い火掻き棒をもって火の加減をあんばいしながら藁を燃している。竈は四つ、そのうち一つは米の飯の小さな釜、次は麦飯の大きな釜、これは麦飯とは言っても米三分、挽き割り

麦三分、粟三分という飯であった。次は鍋で、中は味噌汁、それから茶釜で、それは茶の出がら、を袋に入れてなおも煮しめるのであった。その四つの竈の火加減を見、上手に火は焚かなければならなかった。何故なら、それだけのものを炊きあげるにつねに一定量の藁が見積もられ、それ以上は一束でもつかうことを佐左衛門はゆるさないからだ。

おしんは利口な女だったから燃しそくなって藁を盗みに藁小屋に走るようなことはしなかったし、いつも藁は少し残した。そんなことまでも必ず佐左衛門の眼にとまるのであった。小忙しく火掻き棒をうごかしていながら、おしんは唄が上手なので毎朝うたった。おしんが美しい声で唄をうたい、友次郎がこれはまためずらしいほどよく透る声で合いの手を入れ、土間の空気がようやく活気づいてくる頃は、やっとそとでは夜が明けはなれるのである。

すでにその頃、嫁のおしんは勝手にある大きな囲炉裏に火を焚きつけ、そこで佐左衛門のためにとくべつ柔らかいものを煮てい、同時に姑のさくが箒やはたきの音をたてはじめた。長男の文四郎がものも言わず起き出し、そのあとから佐左衛門は、びかりびかり眼を光らしながら起きて出た。

佐左衛門は起きたつとすぐ庭に出、急いでひろい庭を越えて門をあげにかかった。門は必ず佐左衛門が自分であげ、それは誰にもさせぬのであったが、その門も必ず隣近所どこのよりも遅れたというためしが嘗つてなかった。佐左衛門はこの門をはやくあげるといふことに、一つの信仰を寄せている。他に先んじて一番早く門をあげるといふことは、誰よりも先にわが家に日を迎え入れることで、村一番の地主の麴屋が、かりそめにもそれを他にゆずるといふことはゆるされぬと考えていた。それが他に先んじられる時は、麴屋が村一番でなくなる時であると家人にもきつく言いきかしてある。

門をはずし樺の一枚板の重い門扉をひらくと、ぎ、ぎと重量のある鉄の軋む音が、早朝の静かな仄白さのなかに響きわたった。門の前はすぐ田だ。五月の田は、すでに鋤き起こされて水が張られ、塗りがえられた真新しい畦畔が、黝々と鴉光りに光っているようであった。田うないの最中なのである。

起きるのがどこよりも早い麴屋では、またどこよりも早く朝飯をすまして野良へ出るのである。

友次郎はもう紺の色もさめて青ッぽい色になった野良着に、下は田渋に焼かれて葱の枯れ葉みたになった股引を穿き、膝の下と踵の上とを藁できつく結え、雑巾のように刺した厚い田前垂れを腰のまわりに巻き、見るから甲斐甲斐しいでたちになって田へ下りて行った。つい二、三年前までは佐左衛門自身もそっくりその通りのでたちになり、友次郎の先にたつて田へも畑へも行くのであったが、胃のぐあいが悪くなってとくべつ柔らかいものを食うようになってからは、田へだけは下りなくなっていた。しかし、ひとりで放してやっても友次郎は誠実な下男で、蔭日向というものが無いことを佐左衛門も知っていた。田には下りなくとも、佐左衛門はうしろの丘の上の畑に出、そこからは耕地は一目で見渡せるので、佐左衛門の百舌鳥のような眼は田の下男の働きぶりをつねに監視しているのである。そしてこの鍊達の年寄りの眼力にかかつては、ちよつとでもその振る鋤に息を抜いても、たちどころに看破られてしまう。

田へ下りて行く友次郎を見送り、佐左衛門はそれから野良支度にかかった。丘の上の畑へ出るのだ。麦の間にさつま芋を植えるのである。下女のおしんは手甲をはめ櫛をかけ、下は腰巻きだけ残して着物はきりりと端折ったいでたちで、前の日苗床から切り出しておいた苗を籠に入れた。そしてそれらの籠を荷車につけた。

佐左衛門がその荷車を曳き、あと押しをおしんがしてうしろの丘へ曳きあげて行くのだ。村の前の耕地が坦々

と広いのにひきかえ、うしろの丘はかなり急にそびえたち、のぼり下りの坂はいずれも勾配が急である。しかも丘の上へのぼってしまっても、畑地はその上に坦々とひらけているのではなく、まるで駱駝の背のように波をうち、多くが段畑や傾斜畑であった。

佐左衛門が荷車につけた芋苗の籠を結えているところへ、うしろから長男の文四郎が、黒の詰め襟の洋服姿で出て来た。片手に弁当包みを持っている。

——きょうは中原かえ？

文四郎が声をかけて荷車の握棒のところを廻ると、

——中原だ。

——それじゃおれが曳いてゆくべよ。

文四郎は弁当包みをおしんの手に渡し、そのいでたちで握棒をとった。

——ほんにそうだな。

佐左衛門は滅多に人には見せぬ鷹揚な笑い方をしてうしろに廻った。

文四郎は三十歳であったがその若さで村の小学校の校長である。黒の詰め襟の洋服で、校長になってからは下駄はやめていつも靴を穿いていたが、そのなりで荷車を曳いて急な坂を上って行った。どの道から曳きあげるにも空き車でさえ後押しがいるほどの坂であった。

中原は一番村に近く、そこからまた坂道をのぼり下りして大原、沖原とつづくのであった。坂道をひとつのぼった上に佐左衛門の麦畑はある。文四郎はそこで車から離れ、おしんの手から弁当包みを受け取ると、黙ったまま麦畑の間に消えて行った。佐左衛門は丘の上へのぼると、長年の習慣からそれはまるで習性のようになってい

るのだが、先ず眼下に見下ろされる耕地に百舌鳥のような眼をくれる。下男の鍬の振り方や足腰の据え方、つまりその働き振りに見入るのである。友次郎にはもはやその必要もないのであったが、一応は睨んで見なければ気がすまない。そして佐左衛門が睨みまわして見なければならぬのは友次郎ばかりではないのだ。顔は見えなくとも、田でその者が誰だかはわかるのである。ひと睨みすればその耕地の持ち田二十町歩はたちどころに指させるのであったが、それらの田に働く佐田家の百人に余る小作人たちも、やはりその鍬のつかい方から足腰の据え方まで、佐左衛門の監視から免れることはできぬのであった。

耕地は相模川右岸にひらけて五百町歩ほどが網の目のようにひろがっていたが、村々が四方からそれをとりかこみ、その藁屋を蔽う樹々の繁みにぐるりととりかこまれて、それは湖のように見えた。川に沿うて厚木の町が白壁の土蔵や板葺きの家並みをならべて長く連なっているほかは、村々はいずれもこの耕地に依存する農家で、その耕地のひろさも、しかし、それをとりまいてさながらそれに挑みかかるような姿勢のそれら村々を数えれば、ひろいとは言えなかった。

佐左衛門の田辺むらの人々は従ってその表耕地ばかりでなく、それに対して裏耕地と呼ばれている隣の戸田むら分の耕地まで出だして行っていた。だから佐左衛門が丘の上から睨み下ろすのは表耕地ばかりではない。その裏耕地も次に睨み下ろすのである。そこにも麴屋の持ち田があった。

その裏耕地も、そこからうしろ向きになると眼の下に眺められた。そこでは戸田川という川の流れに沿うて耕地があり、両側の高い丘陵地帯の間にそれは細長く食い込んでいた。戸田川はすぐ隣村で相模川に入るので、従って耕地もそこで表耕地と一緒になるのであったが、佐左衛門の田辺むらとその裏耕地とは、馬の背のような中原の丘を境にたがい背中合わせになっているのだ。

佐左衛門は表耕地の次には、必ずこの裏耕地を眺むことを忘れない。おしんはもう麦の間に芋苗を植えていた。きびしい主人の監視と叱咤の下で、また友次郎の手きびしい仕込みもあって、おしんは女ながら野良仕事もいっぱし一人前はやりぬくのであった。仕事にかかれば脇見もせずやりまくる癖の佐左衛門は、その仕事にかかる前の睨み下ろしや睨み廻しはおしんなどが呆れるほど長かった。

——はれまあ且那様はまだ睨んでなざる。なかなか小言のたねが見つからねえんですね？
と、麦の穂の間からおしんは首を覗かせて言った。

——何をほざく。篋棒め！

佐左衛門ははげしく振り向いて叱咤した。

しかし、おしんは、この主人の篋棒めという叱咤に二様あることを知り抜いていた。普通の者ならにやりと愛撫の一笑を投げるような場合でも、この主人はそういうのはげしい叱咤でそれに代えるのであった。

その証拠には佐左衛門はそれを汐に芋苗をつかみ、麦の畝の間に姿を沈めた。そうなるともうお昼に帰るまでは口もきかず脇目も振らず仕事がつづくのである。

まださつま芋を植えている者は誰もなかった。誰でも一日も早く植えたがっているのだが、田の方もあり蚕もあり、手が廻らないでいた。何に限らず人より先にはじめなければ承知できぬのが佐左衛門の性分であったが、とくに蒔き付けや植え付けにはそれが厳格であった。「一日の怠りは一カ月の凶作」と佐左衛門は言い、人より遅れている自家の小作人を見ればところ嫌わず叱りつけなければ承知しなかった。

とくにさつま芋などは植え付けが一日早ければ十日も早く掘れるのであった。誰よりも自家が早いということ
で彼は満足し、次に誰よりも遅いということでは彼は腹を立てるのである。

脇目もふらず植え付けをしながら、佐左衛門もおしんも麦の中にまったく姿を沈めていると、

——旦那さん、旦那さん……。

と、佐左衛門を呼ぶ声が作間道の方から聞こえた。

声ですぐにそれが後妻のさくである佐左衛門は気づき、きつく舌を鳴らしながら起きあがると、さくは作間道に立ち竦み、まるで見当ちがいの方を見て呼んでいた。

——どっちの方を向いてやがるんだ。おぬしは？

佐左衛門はいきなり一喝した。

このおぬしという二人称は、佐左衛門のつかういろいろなそれらのうちで、最もきびしい蔑称であった。彼は下男や下女にさえよほどのことでなければそれをつかわなかったが、さくにはいわれもなくそれを口にするのである。少しのろいこの後妻が彼には我慢がならないのだ。

——銀さんが来ていますんで……。

さくはおろおろした声で言った。

——なにーッ？

佐左衛門は相手が言いも終わらぬに一喝した。

人が何か言い出すと、みなまで聞かずこの「なにーッ？」という一喝をいきなり佐左衛門はあびせかけるのである。それは聞こえぬから問い返すというのではない。謂わば合いの手のようなものだが、その叱咤から免れる者は村にはなかった。

——銀さんが来ていますんで……。

さくはまた繰り返さなければならなかった。

——銀さんは幾人もいる、篋棒め！

佐左衛門はまた大喝した。

相手が何か言い出すといきなり「なにーッ？」ときめつけ、それからまた言い出すと今度はこの「篋棒め！」で叱咤する。これも合いの手のようなものだったが、最初に「なにーッ？」とくらわされてまたはじめから言い返すようなやつには、次のこの「篋棒め！」は益々辛辣苛酷になるのである。

——あの、二分銀の銀次郎で……。

さくは、もともとそうでなかったのに、いまはそのおろおろ声は地声のようになっている。

佐左衛門はきつく舌を鳴らした。彼は太陽を仰いで見た。もう一時間もすれば帰る時刻なのだ。

——とんでもねえ時刻に来やがって、篋棒めが……。

と、まるで当のさくに食ってかかるみたいに佐左衛門は罵った。

——何ですか至急にお目にかかりてえと言っていますで……。

——そりゃ向こうの勝手だわ！

忌々しそうに彼はまた罵ったが、しかし、心からそうなのではなかった。

二分銀の銀次郎というのは地所の周旋屋である。村々の地主のところにも出入っている、地所の周旋だけで一家の暮らしをたてている年寄りであった。佐左衛門もこの年寄りとはとくべつ懇意にしているが、信用もして、貸金の取り立てなどは相手が他村の者の場合はよく彼を使うこともあった。銀次郎がやってくることで、悪い話というのではないのであった。だからこそさくも、こうしてわざわざ迎えに出て来たのである。

——とんでもねえ時刻に来やがりやがって……。

と、佐左衛門はまださくに食ってかかり、そういう無理難題には慣れている筈なのに一向慣れず、おろおろ身ぶるいさえしているその気のきかぬ妻女を、見下げ果てたようにひと睥み見据えたのち、やっと彼はのこのこ作間道へ出た。

おしんはそういう間も脇見をするでなく、聴き耳を^た欷てるでもなく、まるで機械のように仕事をつづけていた。この下女もひとり放しておいても蔭日向ないことを佐左衛門は知っているので、彼女には言い残すこともなく、彼はさくには振り向きもせず歩き出した。

ぶりぶり腹を立てている、路の泥を蹴上げるような歩き方であった。さくはそのうしろから、あまり近く寄るも怖く、さりとてあまり離れるとまた怒鳴られそうな気もされ、相変わらずおろおろと^つ跟いて行った。

二分銀の銀次郎が何しに来たのか、佐左衛門にも見当がつかないでいた。ただこういう中途半端な時刻にやってくるようなことは殆んどない銀次郎である。いつも暮れ方に来て夜っぴて飲んで帰るか、たまには昼食後を見計らって暮れ方まで居続けてゆくのである。さくに怒り散らして見せたとは打ってちがいがい、だから佐左衛門のそのぶりぶり腹を立てている歩き方は、実際はまんざらでない期待にはずんでのことであった。

——二分銀はどんな用だど？

振り向きもしないで、さくがうしろのどの辺に跟いて来ているかもたしかめず、彼はそんなことを言ってみたのが、その証拠であった。

さくが答えなかったのにも佐左衛門は咎めだてをしなかった。

坂を下りて行くと、下からのぼって来た一人の百姓が、下りてくる佐左衛門に気がつかなかったか、路の端に